

氏 名	劉 慶
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	第4427号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者
学位論文名	御家騒動物についての研究 近世前期演劇を中心に
論文審査委員	主査教授 阪口 弘之      副主査教授 村田 正博 副主査教授 塚田 孝

### 論文内容の要旨

元禄歌舞伎には、御家騒動を取り込んだ作品が多く目に付く。これらは架空の人物を設定し、加えてそれまでの演劇や民間説話から題材を求める形をとる。元禄の歌舞伎は十中八、九は御家騒動物であるといわれ、それらの作品は内容、構造、また趣向など各面で江戸中期以降の御家騒動物の流行のための先駆的な役割を果たすこととなった。元禄歌舞伎の構造は、御家の惣領が淫酒放蕩の間、継母などの悪人が御家横領を企て、旧主一族や忠臣が苦難に陥る。忠臣が献身的に奮闘し、やがて悪事が露頭し、悪人が滅び、御家は回復、安泰となるというような筋をたどる。元禄歌舞伎におけるこのような構造は、如何なる過程をへて完成したのか、さまざまな議論がある。

本論文は、演劇史という立場から、この御家騒動物の展開を分析し、その背景に見える時代的特質、及び創作方法の具体相について論述している。そこでは、御家騒動物の構造の萌芽的な姿が近世初頭の寛永期の古浄瑠璃に既にみられること、家族の流浪漂泊を語る説経にも御家騒動物の構造が盛り込まれていること、又、そのこととも関連して、近松の高僧伝にも、御家騒動が取り込まれていること等々、御家騒動物の特質が従前の元禄歌舞伎を対象に捉えられてきた枠組にとどまるものでないことを論じている。

本論は、次の三つの部分から構成される。

第一編の第一章では、古浄瑠璃の御家騒動物が中世の文芸を継承しながら、独自の構造を獲得する過程を論じる。第二章では、段物集に収められた「しだ中国道行」を手がかりに、「信田」の近世演劇における展開過程について論述している。即ち、「信田」は古い伝承にはじまるが、近世初頭、浄瑠璃で御家騒動物化され、それがやがて元禄浄瑠璃や歌舞伎の萌芽になったということを述べている。第三章では、『許多脚色帖』に収載されている『錦戸合戦』の零葉と題簽を紹介し、和泉太夫の『にしきど合戦』への関わりを明らかにする。これによって、金平浄瑠璃流行の旗手とされる和泉太夫と岡清兵衛の連携が『きそ物かたり』の時期から始まるとされてきた従前の見解に新たな視点からの補強を試みる。第四章では、金平浄瑠璃流行の寛文期に再び正本刊行された寛永期の御家騒動物を取り上げ、これらの作品はただ読み物として再び刊行されたのではなく、その古い時代の作品が寛文期に於いてなお、しばしば上演されてきたことを説く。一方で、これら寛文期に再び蘇った作品の中で書き換えられた部分に注目すると、それ以前に比べ、忠臣の描写にウエートが置かれ、御家騒動物としての特色が色濃くにじみはじめていることを述べている。そして、このような忠臣描写が、元禄御家騒動物の忠臣描写へとつながっていることを説く。

第二編の第一章では、説経作品の中で唯一作者名がみられる天満重大夫の『常陸国板子村大道人嵩山上人之由来』を取り上げ、作品中の家族流浪の場面を手がかりに、地方伝承と説経との関わりを論じている。第二章では、元禄江戸説経座の新作である江戸孫四郎の『弘知上人』、結城孫三郎の『越前国永平寺開山記』の創作方法を考察し、本来悲哀を語るはずの説経にも浄瑠璃の御家騒動物の構造が取り込まれていることを論じている。

これは、説経と浄瑠璃とが興行方式と作品内容共に接近した結果であり、こうしたことが実は説経衰退の契機ともなっていることを論述している。

第三編では、元禄浄瑠璃・歌舞伎における御家騒動物について論じている。第一章は、元禄歌舞伎御家騒動物によくみえる継母の描写を中心にした考察。近世演劇における継母の描写はとりわけ説教で目につくが、延宝・貞享期では浄瑠璃に取り込まれて、元禄歌舞伎における継母描写の大きな布石となった。そして、元禄歌舞伎で新たな飛躍を遂げた継母の描写は、今度は逆にその後の浄瑠璃にも影響を与えたという具体的な様相を論じている。第二章では、近松の高僧伝に注目し、高僧の一代記が御家騒動物的な構造で描かれている点が、近松の高僧伝の特質であることを論証している。

上述の如く、本論は、御家騒動物のありようを、時代的変遷のうちに辿りながら、歌舞伎とその周縁ジャンルでいかに劇化をみたかを考察し、元禄歌舞伎で典型化する御家騒動物の特質を明らかにしたものである。それと同時に太夫問題、座付作者と作品の関係、地方伝承と都市芸能の関係などについても、見解を提示している。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は御家騒動物の時代的展開と特質を解明しようとした研究である。従前、この種の研究は元禄期の歌舞伎狂言、あるいは又、江戸後期の実録物などの枠組みの中で、その特質を追求する形で行われてきた。そうした中で論者は、「御家の没落」「愛別離苦・流浪漂泊」「再会・復讐」「御家の再興」という四つのプロットを設け、このプロットの流れに則る作品を「御家騒動物」と規定して、元禄期の「御家騒動物」に収斂する演劇史の流れを確認し検証する。通例論述される「御家騒動物」の発想を越える文学史観が何よりも斬新で、外国人研究者ならではの新鮮な見解を導き、注目すべき成果を示しているといえよう。本論文がそうした意欲的な発想に基づく労作であることをまず評価して、以下に審査結果を略述する。

本論文の概要は別記「論文内容の要旨」に示した通りであり、古浄瑠璃、説経、元禄浄瑠璃・歌舞伎の三方面から、論者が述べるところの御家騒動物の展開を辿り、その構造と描写法を分析検証する。

第一編は、古浄瑠璃を対象とする。

まず第一章では、上述のプロットが、中世物語と接続してある寛永浄瑠璃に逸早く認められると説き、「御家騒動物」の基点を確認。続いて第二章では、「信田」を手掛かりにその展開を具体的に辿る。口承性に根ざす作品本文に、御家騒動物の萌芽を見る注目すべき見解で、四つのプロットを設定しての作品分析も首肯すべき結論を導いている。

第三章は、論者発見の「錦戸合戦」零葉から、承応4年正月の「にしきど合戦」に和泉太夫の関与を推断して、承応期という金平浄瑠璃史の最古の部分で貴重な追補を果たした。

第四章は、御家の忠臣描写を中心に寛文期の古浄瑠璃作品の特質を抽出している。寛文期浄瑠璃との「接断」に今後なお議論の期待されるところがあるが、元禄期の忠臣描写の先駆をこの時代にみてとるべきとの説得的な論述は尊重されるべき見解であろう。

第二編は、説経を対象とする。

第一章は、まず、複雑にもつれあう江戸説経太夫の動向をよく整理して、天満重太夫の事績に新見解を提示する。それらを承けて、重太夫の「常陸国板子村大道人嵩山上人之由来」をとりあげ、新作説経の作劇法を、モデルの伝承的拡がり、語り手の日常性との交錯する空間に見事に浮き彫りにした。ただし、論者が指摘する重太夫の地方生活の実態には確証を得がたい部分も残り、歴史学の知見をも含めてなお論証を要するであろう。

第二章は、限りなく浄瑠璃に接近していく末期説経が、その浄瑠璃をはじめ、諸ジャンルに霧散していく中で辛うじて命脈を保った様相を、都市芸能史の一側面としての的確に位置付けた。説経ジャンルの衰退が、それ

を担った芸能者たちに新たな再生の場を与えていく都市芸能の皮肉な現実をあぶり出して貴重な知見である。

第三編は、元禄期の浄瑠璃と歌舞伎を対象とする。

第一章は、継母描写の系譜を丹念に辿り、元禄歌舞伎で一挙に多様化する描写法の特質を照射する。説経が継母継子世界の再創造をいかに果たしたか、論者の独自の視座が、従前の「元禄御家騒動劇」論を越えて、伝襲世界の継承と説経独自の創造的営為を切りわけて、その様相を明確にしている。

第二章は、御家騒動劇の到達点が近松高僧伝にもみられることを指摘した論。近松劇に御家騒動劇の達成をみる論者の立場を明確にして、今後の課題を方向づけている。

本論文は、叙上の如く、近世演劇や文学の一典型とみなされ、これまでさまざまに研究の積み重ねをみてきた「御家騒動物」について、御家の没落と再興、その間の主人公らの悲劇的境涯を論者設定の四つのプロットをもって見直すことで、「御家騒動物」により長大な文学史的展開のあることを主張した労作である。論者は中国出身の留学生であるが、外国人研究者がこの種のテーマに取り組んだことは未だ仄聞しない。そうした意欲的な取り組みであるが、その成果もまた、日本人研究者に優るとも劣らぬものと評価して過言でない。引用史料の説明や資料解釈上に若干の不備も認められるが、寛永期から元禄期までの諸作をよく読み込み、変貌再生する御家騒動物の様相を見事に浮き彫りした本論文のきわめて顕著な成果は高く評価されよう。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。